シリーズ（最終回）

哲学者から見たアクティブ・ラーニング　2

熊本大学准教授　苫野一徳

1．哲学者はいかに学ぶか

「主体的・対話的で深い学び」といえば，哲学者など学問探究者の学びは，その最たるものといえる気がします。そこで今回は，まずは「哲学者はいかに学ぶか」というお話から始めることにしたいと思います。

どんな哲学者も，どうしても解かなければならない問題を持っています。「人はどうすれば幸せになれるのか？」「よい教育とは何か？」「資本主義の未来をどうするか？」など，それぞれに切実な問題関心を抱いています。

過去の哲学者たちも，それぞれがそれぞれの時代において，どうしても解かなければならない問題に取り組んできました。「どうすれば自由で平和な社会を築けるのか？」(ルソー，カント，ヘーゲルなど)，「最も深い思考の土台は何か？」（デカルト，フッサールなど)，「どうすれば人生を豊かに生きられるのか？」（ニーチェなど）……。誰もが強烈な問題意識に突き動かされ，強靭な思考力をもってこれらの問いに答え抜きました。

そんな哲学者たちは，いったい何をどのように学ぶのでしょう？

哲学の本質は，物事の最も大事な「本質」を洞察し，そのことによって，それにまつわる様々な問題を解き明かすことにあります。よい社会の本質は何か，よい教育の本質は何か，幸せの本質は何か……こうした様々な事柄の「本質」を洞察し，ではそのような社会，教育はどうすれば可能なのか，どうすれば幸せになれるのかといった，根本的な考え方を提示するのです。

そのために最も重要なことは何か？

ソクラテスの時代から，哲学の基本はいうまでもなく「対話」です。

「本質」といっても，それはどこかに転がっているようなものではありません。人知を超えた「絶対の真理」のようなものでもありません。それは，私たちが「対話」を通して見つけ出していくものなのです。ソクラテスはいいました。正義，友情，恋，徳，そうしたものの本質を，私は知らない。だからこそ，対話を通して共に見つけ出していこうじゃないか，と。

互いの考えをテーブルの上に出し合い，それが独りよがりのものになってはいないか吟味しながら，できるだけ誰もが納得できる深い本質にたどり着く。哲学とはそのような探究にほかならないのです。

2．2500 年の知の集積を学ぶ

でも，もちろんそれだけでは十分ではありません。人間が考えることや思い悩むことなんて，実はいつの時代も似たり寄ったりです。そして過去の偉大な哲学者たちは，それらの問題のほとんどに，すでに一定の答えを与えているのです。

だから哲学者は，これまでの哲学者たちが，何をどのように考え明らかにしてきたか学ばなければなりません。そしてその上で，今の時代におけるもっとすぐれた考え方を展開していく必要があるのです。

私の師匠は竹田青嗣という哲学者ですが，彼に弟子入りしてからの数年間，私は，プラトンやアリストテレスに始まって，デカルト，カント，ヘーゲルなど近代の哲学者たち，そして，ニーチェ，フッサール，ハイデガー，デリダなど現代の哲学者たちに至るまで，主要な哲学者の本を時代順に追って読み，週に１～２冊，平均３万字，時に５万字を超えるレジュメを作成し，毎週師匠と議論するという修行を続けました。「世界の名著」というシリーズがありますが，ここに登場する哲学者の本は，最初の１年でほぼすべて読みました。

私のブログには，古今東西の哲学書 400 冊ほどの紹介・解説をアップしていますが，こうした地道な修行が，哲学をするには欠かせないのです。

膨大な哲学の教養を身に付けたなら，これまでどのような問題がどのように解き明かされてきたのかが分かります。そしてその上で，自分が何をどのように探究し解明していくべきかも分かるようになるのです。

今ももちろん，このような修行を続けています。問題関心が広がるにつれて，哲学だけでなく，歴史学，経済学，社会学，人類学，宗教学などの重要著作も，膨大な数を読まなければならなくなりました。社会学の泰斗，見田宗介は，「切実にアクチュアルな問題をどこまでも追求しようとする人間は，やむにやまれず境界を突破する」といっていますが，それはつまり，自分の問題関心に応じて，私たちはあらゆることを学び続けなければならないということです。そしていうまでもなく，それは私たち探究者にとっての最高の快楽なのです。

自分にとって切実な問題を，対話を通して，深く深く学び解き明かしていく。「主体的・対話的で深い学び」とは，まさに私たち（哲）学者の学び方にほかならないのではないかと思います。

３．落ちこぼれの子ども時代

と，今はこのように「学ぶこと」が仕事の私ではありますが，実をいうと，子どもの頃は勉強が本当にできない少年でした。『子どもの頃から哲学者』という本にも書いたことがあるのですが，私の生まれ育った地域は，当時中学の受験戦争がきわめて苛烈で，超スパルタで有名な進学塾に通わされていた私は，いつも成績がビリでした。その塾は，毎回授業前にテストを実施して，あろうことかベスト３とワースト３を発表する塾でした。

いつもワースト１位に輝いていた私は，ひどい劣等感をずっと抱えていました。あまりに成績が悪いので，ある時母親が呼び出され，塾の先生に，「この問題解いてみろ」と親の前で計算問題を解かされたこともありました。

あり得ないようなケタ数の答えを導き出した私は，ものの見事に大きな「×」をもらいました。「ねえお母さん，この子はこんな問題も解けないんですよ」。そういった先生の声が忘れられません。

実際，当時の私にはある深刻な問題がありました。

子どもの頃から，私は手塚治虫のマンガと本ばかり読んでいて，毎日ほとんど空想の世界に生きていました。だから，たとえば算数の文章問題で，「リンゴが三つ，みかんが五つあります……」みたいな問題を読むと，勝手にその続きを空想して，「そのうちの一つには毒が入っていて……」などと，頭が別の方向に行ってしまうのでした。

国語の文章題も同じでした。小説でも何でも，読んでいるうちに勝手に続きを空想して，問題には，その自分が作った物語について答えを書くということがしばしばありました。

「やらされる」勉強には，とことん興味を持てませんでした。だからいつまでたっても，成績は中々伸びませんでした。子どもの頃に抱かされた劣等感は，今も完全には消え去っていません。

でもその一方で，当時から私には探究したいテーマがあり，それにはいくらかしっかりと向き合っていたと思います。今の私は，「多様で異質な人たちが，どうすればお互いに了解・承認し合えるか」を生涯の探究テーマにしていますが，これは当時から抱き続けているテーマです。こうした「実存的」な関心を胸に，たくさんの文学や思想書を読み漁っていました。やらされる勉強には興味が持てなかったけど，自分にとって本当に大切で切実な学びはあるんだと，子どもながらに考えていました。

哲学に本当の意味で出会ったのは，少し遅めの24，５歳の時のこと。自分がやりたいのは哲学だったのだと気づいてからは，勉強が心底好きになりました。もっとも，先述したように子どもの頃のトラウマはそう簡単には消えません。どれだけ勉強を重ねても，勉強に対する苦手意識や劣等感は，今も私の奥底にうごめいています。でも，「学ぶ」とは一体どういうことなのか，今の私には，私なりの手応えがあるように感じています。

４．探究型の学び

もちろん，私は誰もが哲学者のように学ぶべきだなどと考えているわけではありません。でもこれまでに書いてきたことには，「学ぶ」ということの本質が，いくらか含まれているように思うのです。

20 世紀アメリカの教育哲学者，ジョン・デューイはいっています。子どもたちには，本来四つの本能的欲求のようなものがあるのだと。一つは，物を発見したいという欲求，二つめは物を作りたいという欲求，三つめは自らを表現したいという欲求，最後にコミュニケーションへの欲求です。

学びたい欲求を持っていない子どもなどいません。でも子どもたちは，これら四つの欲求を，時に学校によって“去勢”されてしまうのです。

今はこれをとことん学びたい，と思っている子どもたちに，「勝手なことをするな，今はこれを勉強する時間だ」という。コミュニケーションをとりながら学びたい子どもたちに，「黙って座って先生の話を聞きなさい」という。そんな経験を重ねていくにしたがって，子どもたちは，もともと持っていた学びたい欲求それ自体をしばしば失ってしまうのです。

ではどうすればいいのでしょう？

デューイが提唱したのは，今日「プロジェクト型の学び」「探究型の学び」と呼ばれる学びのあり方です。子どもたちの，発見したい，物を作りたい，表現したい，コミュニケーションしたい，という欲求を，最大限活かした教育のあり方です。

それは，出来合いの答えを，何度も繰り返し子どもたちの頭に叩き込む学習とは違います。時に教師も詳しく知らないようなテーマについて，自分（たち）で問いを立て，自分（たち）なりの仕方で，自分（たち）なりの答えにたどり着く，そんな学びのあり方です。

前回もいったように，私は，これからの時代，こうした「探究型の学び」をカリキュラムの中核にしていくべきだと考えています。もちろん，いわゆる基礎学習は重要です。でもそうした学習も，プロジェクト型の学びを核にすることで，より深められていくのです。

再び個人的な話で恐縮ですが，とにかく勉強が苦手だった私も，様々な哲学的テーマを探究するにあたって，どうしても多くの教科的な勉強をやり直さなければならなくなりました。哲学をするには世界史の知識が不可欠ですし，宗教についても知らなければなりません。経済学も必要です。でもそうした勉強も，すべての学習内容がわたしの探究テーマに関連づけられているので，ただ無目的に決められたことを勉強し続けるのとは全然違います。試験のために記憶し，試験が終われば忘れるといった類のものでもありません。自分の探究と関連づけることで，知識はしっかりと奥底に定着するのです。

５．高次の忍耐

さて，でも以上のようなことをお話しすると，よく次のように言われます。「強制的な勉強を減らしたら，子どもたちが忍耐力を身につけられなくなるじゃないか」「子どものうちは，決められたことをちゃんとガマンして学ぶことが大切だ」と。「学校は理不尽を学ぶところだ」なんていう主張も，時折聞きます。

このような考えは，教育界に意外に根強いものです。「やらされる学び」や「理不尽な決まり」などに，多くの教育関係者は実際に耐えてきた経験を持っているから，そしてその中で成功してきた経験を持っているから，その意義を特に強調したい傾向があるのかもしれません。

でも私は，ここでいう忍耐力は，きわめて次元の低い忍耐力であるように思います。

我慢や忍耐には，低次のものと高次のものとがあるのです。上のような，やらされることにただただ耐える忍耐力は，私の考えでは“受け身”の忍耐力にすぎません。

もっと高次の，“能動的”な忍耐があります。それは，自分が探究したいことのために，とことん粘り強く学び続ける忍耐です。この忍耐力をもって，子どもたちは時に怠けたい気持ちを我慢

する。辛抱強く人と折り合いをつけようとする。時に環境を変えることにさえ取り組もうとする。そのような「能動的忍耐」の経験こそが，子どもたちに，将来どんな環境に置かれたとしても，力強く乗り切って行ける力を育んでくれるはずなのです。

デューイの高弟で，「プロジェクト・メソッド」を体系化したキルパトリックは，プロジェクト型の学びにおける「付随的反応」の意義を強調しました。

たとえば，強制的にある教科内容を勉強させられている子どもと，自らのプロジェクトの過程で，その内容を興味や必要に駆られて学んだ子どもがいたとします。両者ともに，学び取った内容自体は同じです。

でも後者の子どもが得たのは，その学習内容以上のものです。プロジェクトを通して育まれる，自尊心ややり遂げる意志といったものがそうです。これをキルパトリックは「付随的反応」と呼びました。プロジェクト型の学びは，こうした高次の忍耐力を，「不随意的反応」として育んでくれるものなのです。

6．先生の学ぶ姿を子どもたちに見せる

前回も書きましたが，探究型の学びをカリキュラムの中核にすると，先生の役割は，出来合いの答えをただ教えるだけの存在から，むしろ「共同探究者」「探究支援者」へとその重点が移っていくことになります。子どもたちは，時に先生も知らないようなテーマについての問いを立てます。その時教師は，子どもたちの問いに答えられる存在であるという以上に，探究支援のプロフェッショナルとして，彼らの探究をサポート・ガイドできる必要があるのです。

そこで最後に，ちょっとラディカルな，こんな提案をしてみたいと思います。

子どもたちが「探究型の学び」にいそしんでいる時間，教師もまた，時に自分の学びを探究してみてはどうでしょうか？　担当教科について，関心のあるテーマをもっともっと深めてみるとか，世界の教育について学ぶとか，難しい実験にチャレンジするとか，何でもかまいません。教師自身も，自分自身の学びをとことん追求するのです。

この多忙化の時代に何をいっているんだと思われるかもしれませんが，冗談半分に受け取ってもらえたらと思います（本当は本気なのですが）。

なぜ，学校は，子どもたち「だけ」が，教師の管理のもとで学ぶ場所になってしまっているのでしょう？　大人だって，一学習者として，子どもたちと一緒に学んだっていいはずです。先生が真剣に学ぶ姿は，子どもたちにとってもきっととても刺激的なことだと思います。「先生も勉強するんだなぁ。何だか難しそうなことやっているなぁ。でも楽しそうだなぁ」。そんなことを，子どもたちは感じ取るはずです。

「共同探究者」というからには，大人も常に学び続ける存在でなければなりません。その学び続ける姿を，子どもたちにダイレクトに示したってきっといいはずなのです。

多くの子どもや保護者たちは，先生が研修などで学び合っていることもあまり知りません。ならばいっそのこと，子どもたちが協同的な探究の学びをしている時間に，教師もまた，協同的な探究の学びに勤しんでみてはいかがでしょうか。「へぇ，先生たちも，お互いの力を持ち寄ってプロジェクトにチャレンジすることもあるんだなぁ」。子どもたちはきっと，多くの刺激を受け取るに違いありません。

子どもたちに「主体的・対話的で深い学び」を求めるのであれば，先生自身がそのような学びを日々行っている必要があります。そしてその姿を，ぜひ，子どもたちに見せてあげてほしいと私は思います。